

おおいしも はる
大井下の原遺跡発掘調査

業者によるメガソーラ設置申請にもとづく文化財調査がおこなわれている。広大な面性であるということで、文化財担当者の案内で発掘現場を見てきた。

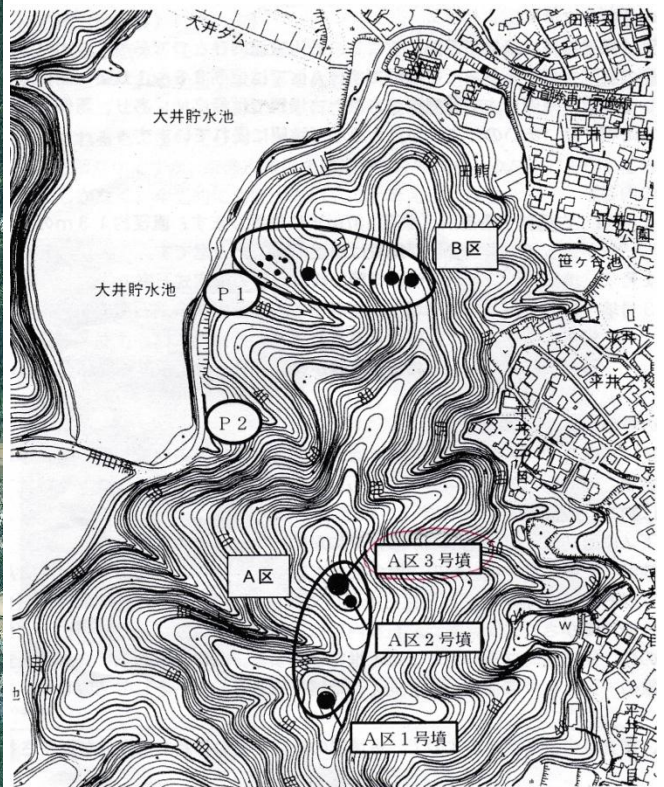
標高30メートルから100メートルの間に発掘された石積が点在している。斜面は急で、6世紀・築造当時、1トンを超える巨石を運び上げるには、相当な技術と労力が必要だったであろう。それから1400年間を経て、森林を伐採しメガソーラの設置が始まった。環境面への影響は大きい。

業者の申請は合法的に行われたということであるが、調査は全体の19分の1しか行われぬ。今後、の工事の進行を注意深く見守っていく必要がある。

- ・場所 宗像市大井
- ・調査 平成28年7月から平成29年3月まで
- ・開発面積約 30万平米、調査面積1万6千平米（およそ19分の1） もとは森林
- ・文化財調査概要 古墳時代・6世紀中ごろから後半の地域豪族の古墳群
円墳 横穴式石室 A区3号墳は巨石が使われ、石室内には赤色顔料
- ・出土遺物 鈴付き子持ちはそう・須恵器・土師器・装身具・馬具
- ・現地説明会 12月3日、地元住民へ発掘現場説明会が行われる。
保存してほしいという意見も出た。



現場上空からの航空写真



大井下ノ原遺跡位置図

酒などをつぐ須恵器製の器 音が鳴る 鈴付子持ち甕 出土

宗像市大井の大井下ノ原遺跡(古墳時代中期～後期)から、酒などをつぐ須恵器製の器「甕」の脚台に入れられた小玉がカラカラと音を鳴らす仕組みを持つ「鈴付子持ち甕」が出土したことが2日、分かった。出土例は全国でも数が少なく、祭祀に使われていたとみられ、同市郷土文化課は「当時の地方豪族の葬祭儀礼を考える上で貴重な資料」と話している。

宗像 大井下ノ原遺跡

大井下ノ原遺跡は3基の円墳が確認されているが、鈴付子持ち甕は最も大きな円墳(直径20㍍)を取り巻くように墳丘中段に並べられた数多くの須恵器群の中にあつた。高さ約30㍍で、酒などの液体を注ぐための器に取り付けられた脚台の中に「がん」と呼ばれる小石や鉄の玉を入れ、カラカラと音を鳴らす仕組みになっている。市郷土文化課は、須恵器群も含め祭祀など重要な儀式に用いたとみている。

また、円墳には横穴式石室があり、中は赤色顔料が塗られていた痕跡があつたほか、鉄刀や鉄製矢じりなどの武器や馬具などの副葬品も出土しており、この地域の有力者が埋葬されていたとみられる。市郷土文化課は「被葬者は宗像地域の小単位を支配する地方豪族の一人として、宗像君一族を支えていたのではないかと説明している。」

【柴田種明】

鈴付子持ち甕。左下の小さな玉が「がん」

円墳を取り巻くように墳丘中段に並べられた須恵器の数々
|| いずれも宗像市提供



発掘現場



地層(四角に割れた石の層)



横穴式石室入口



巨石



現場西側の山並みの間から新宮町相ノ島がみえる

平成 29 年 1 月 18 日現地で撮影

平松秋子